

様式 1

研究報告書 (平成 28 年度)

提出者 三木那由他

提出年月日 2017. 3. 22

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文

英語圏の地域とアジア諸地域のコミュニケーション様式の違いが意味の理論と語用論にもたらす帰結

英文

Differences between Anglo and Asian styles of communication and their implications for the theory of meaning

**【研究のねらいと目的】** (600 字程度)

本研究は、コミュニケーション様式の文化差を手掛かりに、従来の意味の理論におけるパラダイムである意図基盤意味論を批判的に検討することを目的とする。意図基盤意味論とは、Grice (1957) 'Meaning' (*The Philosophical Review*, Vol. 66, No. 3, pp. 377-388.) で提示された見解であり、話し手が何かを意味するということと、特有の意図を持って発話をおこなうということとを同一視し、その意図が具体的にどのようなものであるかを突き止めることで意味の理論を構築しようという立場である。この立場においては、人々が形成する意図、そしてその意図の形成に関与する合理性こそがコミュニケーションの本質を与えるものとされ、人間は文化によらず共通の理性と心理をもとにおおよそ同じようにコミュニケーションを取るものと想定される。だが近年、Lepore & Stone (2015) *Conventions and Imaginations* (Oxford University Press) でまとめられているように、そうした理性中心主義に反し、コミュニケーションの文化差を指摘する研究成果が挙げられている。それを踏まえて、意図基盤意味論に代わった新しい意味の理論の道筋を描くことが本研究の目標である。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

三木那由他, 学会報告「話し手の意味を決定する主体という想定」, 日本科学哲学会第大会, 11/19, 新潟大学.

**【成果の概要】** (800字程度)

コミュニケーションの文化差を手掛かりに意図基盤意味論を改めて検討した結果、意図基盤意味論の妥当性に関するいくつかの反例を見つけることができた。それは意図基盤意味論の想定する理性中心主義のもとでは、話し手が何を意味しているのかが原理的に話し手の自由のもとに置かれることになるという点から作られた反例であった。そうした反例についての考察をもとに、話し手の意味の問題が集合的認識論の問題とつながっているという可能性を発見した。集合的認識論とは、集団に心理が帰属される場合（「あの企業は環境保全を求めている」など）にそうした心理帰属の特徴を、とりわけ個体への心理帰属との比較から分析する分野である。私の発見したことは、話し手の意味はその成功の際に話し手と聞き手から成る共同体の集合的な心理を変化させるのであって、単に話し手や聞き手の個人的な心理を変化させるのではなく、そしてその点は意図基盤意味論のように話し手個人が理性に基づいて自由におこなう振る舞いとして話し手の意味を捉える限りうまく扱えないということであった。以上のことは、日本科学哲学会において発表された。さらに Gilbert (2014) *Joint Commitment* (Oxford University Press) の議論を批判的に参照することで、話し手が何かを意味するためには、話し手と聞き手がすでに何らかの同じ共同体に属し、その共同体において共有されている手続きを利用しなければならないという捉え方が有効であるという着想を得た。こうした共同体主義的立場のもとでは、コミュニケーションの文化差はその自然な帰結として説明されることになるだろう。本研究において十分に遂行できなかった点として、具体的な比較語用論的な検討がある。既存の言語学上の研究において、文化の違いによる語用論の違いという問題は、いまだいくつかの現象が集められているだけという段階にとどまっており、当初想定していたように具体的な会話事例を豊富に参照しながら研究を進めるには至らず、抽象的な議論の構築に終始することとなった。

**【通信欄】**